長岡京市文化財調査報告書

第69冊

2016

長岡京市教育委員会

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京市文化財調査報告書

第69冊

2 0 1 6

長岡京市教育委員会

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

私たちの長岡京市は、豊かな水と緑に恵まれた良好な環境と大都市を結ぶ交通の利便性により発展してきたまちです。

古くは旧石器時代から人々が生活を営んだことがわかっており、特に784年に「長岡京」という当時のわが国の都が置かれた地として、全国的に知られています。また、市内には史跡恵解山古墳をはじめとした首長墓や、勝龍寺城などの城館跡、乙訓寺・長岡天満宮といった神社仏閣など、数多くの文化遺産が点在し、現代に至るまで豊かな歴史と文化を守り育んできました。

しかし、こうした遺跡は、まちの発展の一方でかつての姿が失われつつあります。本市では、これらの遺跡の調査・保護に力を入れるとともに普及・啓発に努め、地域全体で風土や文化遺産を守るまちづくりを進めています。特に今年度は、広域的な史跡指定を目指してきた「乙訓古墳群」が、古墳時代を通して首長墓の系譜を辿れ、当時の政治状況を知ることができる極めて重要な古墳群として指定されました。これにより、本市では、すでに国の史跡である恵解山古墳に加え、井ノ内車塚古墳・井ノ内稲荷塚古墳・今里大塚古墳が新たに国の史跡となりました。

さて、本報告書は、平成27年度に長岡京市教育委員会が実施した井ノ内地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査は長岡京の全容解明を目的として実施し、井ノ内地区では、乙訓地域の首長墓系譜を考えるうえで重要な井ノ内車塚古墳の後円部西側に取り付く造り出しの状況や墳頂部に埋葬施設の痕跡を確認しました。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や 地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していただ いた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。 本書が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いた だければ幸いです。

平成 28 年 3 月

長岡京市教育委員会

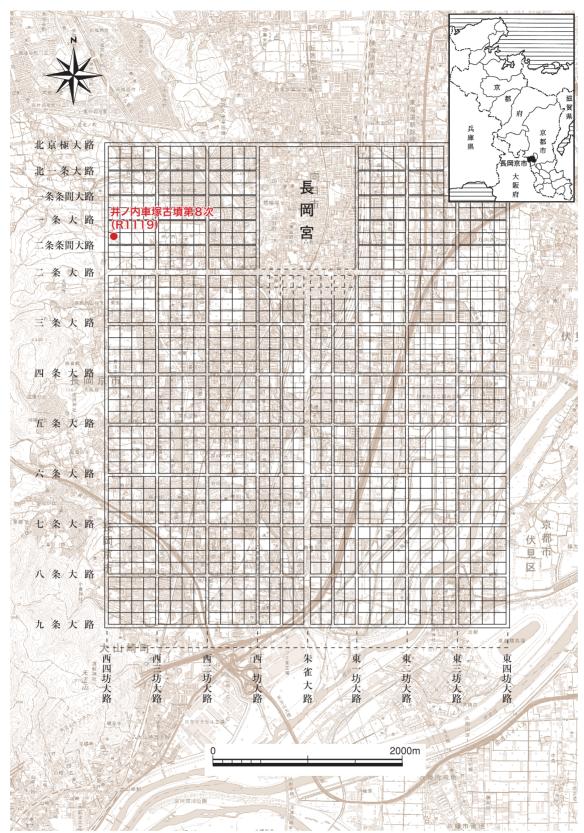
教育長 山 本 和 紀

凡例

- 1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成27年度に国庫補助事業として公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査に関する概要報告である。
- 2. 調査対象地は、第1図および付表-1に表示した。
- 3. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、 前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』 (1977年) 収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
- 4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年) の復原案に従った。
- 5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一 (1991年) によった。
- 6. 本文の(注)に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』(五)(2015年)に従って略記した。
- 7. 本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、煩雑さを避けるため調査次数を省略する場合がある。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。
- 8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。
- 9. 本書の挿図の土層名で〈 〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』(1997 年版) の JIS 表記法による土色名である。
- 10. 本書の執筆及び編集は、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの中島が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所在地	現地調査期間	調査面積	備考
井ノ内車塚古墳 第8次 長岡京跡右京 第1119次	7ANGKT-9	長岡京市井ノ内向井芝4	2015年8月20日 ~ 2015年11月25日	148m²	井ノ内車塚古墳



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本 文 目 次

	1 1 1 - 1 1 - 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	_	. F I a land
井ノ	内車塚古墳第	8	次調香機要

— 長岡豆跡右豆第1	119次	(7ANGKT-	0 冊区) —

1	はじめに	1
2	調査経過	2
3	検出遺構	6
4	まとめ	18

ii

図版目次

図版 1	調査均	地全景(北西	から)			
図版 2	(1)	1トレンチ	全景 (南東から)	(2)	1トレンチ	全景 (西から)
図版3	(1)	1トレンチ	前方部周溝の遺物出土	(2)	1トレンチ	周溝の堆積状況
		状況(東かり	5)		(南西から)	
	(3)	1トレンチ	土壙墓 (南から)			
図版4	(1)	2トレンチ	全景 (南東から)	(2)	2トレンチ	全景 (北から)
	(3)	3トレンチ	全景 (南東から)			
図版 5	(1)	3トレンチ	須恵器出土状況	(2)	3トレンチ	赤色顔料出土状況
		(南東から)			(北西から)	
	(3)	3トレンチ	礫集中部 (南東から)	(4)	4トレンチ	全景 (南西から)
図版 6	(1)	5トレンチ	全景 (南西から)	(2)	5トレンチ	全景 (東から)
図版 7	(1)	5トレンチ	造り出し上面の状況	(2)	5トレンチ	造り出し北側の小穴
		(北西から)			(南から)	
	(3)	5トレンチ	造り出しと北壁の土層			
		堆積状況(南	南から)			
図版 8	(1)	5トレンチ	埴輪出土状況-上面	(2)	5トレンチ	埴輪出土状況-上面
		(西から)			(東から)	
	(3)	5トレンチ	埴輪出土状況-下面	(4)	5トレンチ	埴輪出土状況-下面
		(西から)			(北東から)	
			付 表 目	当	7	

付表-3 報告書抄録 18

挿 図 目 次

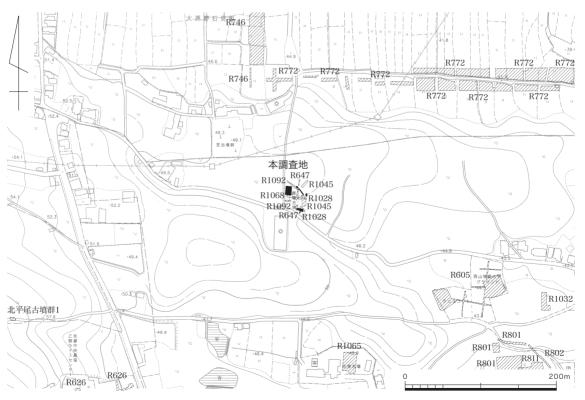
第 1 図	長岡京と調査	査地の位置(1/40000)		iii
第 2 図	発掘調査地位	位置図(1/5000)	•••••	1
第 3 図	井ノ内車塚市	占墳調査区配置図(1/500)		2
第 4 図	井ノ内車塚戸	占墳墳丘測量図(1/200)	······	3
第 5 図	現地説明会属	風景(南から)	· · · · · · · · · · · · ·	4
第 6 図	5トレンチ	埋め戻し風景(北西から)		4
第 7 図	墳丘と調査図	区全体図(1/200)		5
第 8 図	1トレンチ	前方部の周溝(北西から)		6
第 9 図	1トレンチ	検出遺構図・土層図(1/50)		7
第10図	2トレンチ	検出遺構図・土層図(1/50)		8
第11図	3トレンチ	検出遺構図・土層図(1/50)		9
第 12 図	3トレンチ	北西隅須恵器等出土状況実測図(1/10)		10
第13図	4トレンチ	検出遺構図・土層図(1/50)		10
第 14 図	5トレンチ	土層図(1/50)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	12
第 15 図	第6次調查2	2トレンチ・第7次調査中央トレンチ・本調査5トレンチ …	····· 13 •	14
	検出遺構図	(1/50)		
第16図	5トレンチ	小穴実測図(1/40)		15
第17図	5トレンチ	造り出し北辺埴輪出土状況実測図 (1/30)		17

井ノ内車塚古墳第8次調査概要

一 長岡京跡右京第 1119 次 (7ANGKT-9地区) 調査 一

1 はじめに

- 1 本報告は、平成 27 (2015) 年 8 月 20 日から 11 月 25 日まで、長岡京市井ノ内向井芝 4 に おいて実施した、井ノ内車塚古墳第 8 次調査(長岡京跡右京第 1119 次調査) に関するもので ある。
- 2 調査は、乙訓古墳群の史跡指定に向け、井ノ内車塚古墳の墳形や規模などを確認する目的で 実施したもので、調査面積は148m²を測る。
- 3 調査地は、長岡京跡の右京二条四坊十五町にもあたるため、長岡京に関わる遺構、遺物の確認も合わせて行った。
- 4 発掘調査は、平成27年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地調査は中島皆夫が担当した。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地権者の方々や関係機関に種々のご理解 とご協力を賜った。
- 6 調査においては、都出比呂志氏(埋蔵文化財センター専門委員)を始め、専門の諸先生方からご指導を賜った。
- 7 本報告の編集と執筆は中島が行った。



第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調查経過

井ノ内車塚古墳の概要

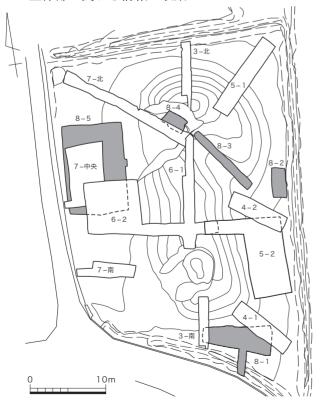
井ノ内車塚古墳では、2回の測量調査と5回の発掘調査が実施されていた(第3・7図、付表-2)。平成26年度に実施した第7次調査までの成果から、これまでに確認されている井ノ内車塚古墳の概要を以下に列記する。

- ・後期の前方後円墳
- ・規模 全長約39 m、後円部の直径約24 m、前方部長約17 m・前方部幅約26 m くびれ部幅約17 m、後円部高約3 m、前方部高約2.5 m(高さは現地表から)
- · 主体部 未確認
- ・外表施設 段築未確認、葺石なし、埴輪(埴輪列未確認)、後円部南西側に造り出し、周溝
- · 埴輪 窖窯焼成、普通円筒埴輪 (3条突帯4段)、朝顔形円筒埴輪 形象埴輪 (家、蓋、盾、巫女、馬、犬、石見型)
- ・土器 土師器、須恵器 (MT15~TK10型式)、韓式系土器

調査の目的

本調査は第7次調査までの成果を踏まえ、以下の3点を主要な調査目的として実施した。

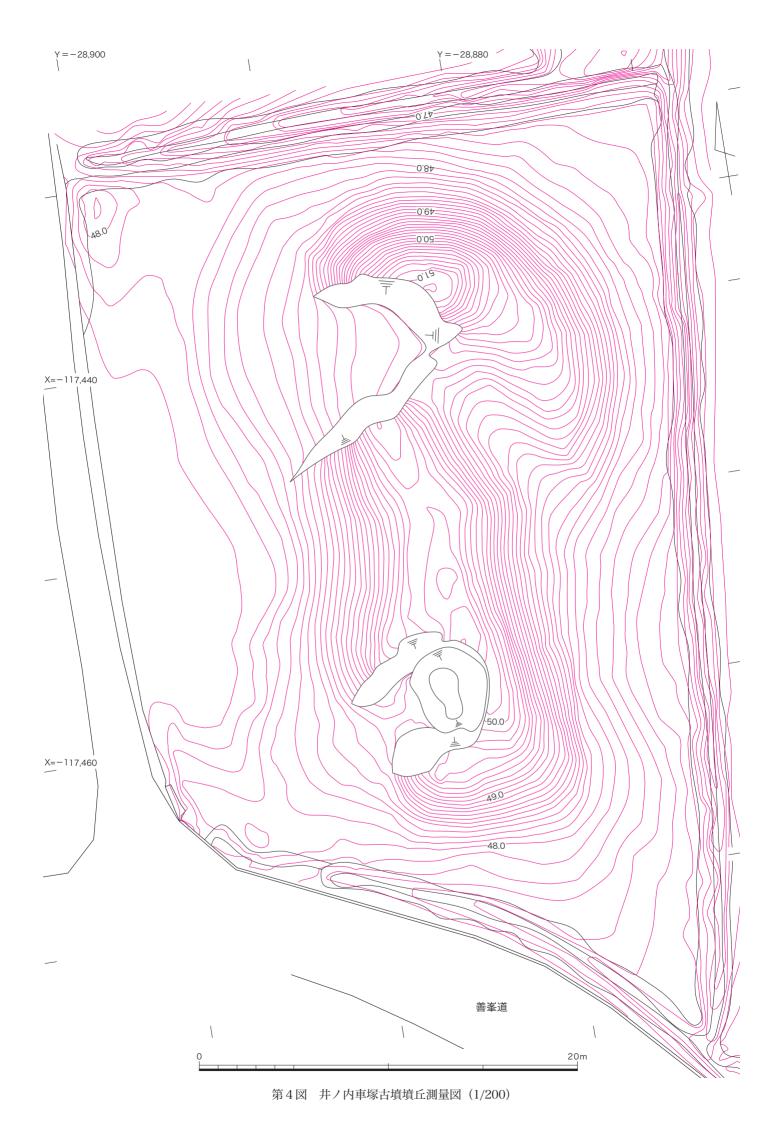
- ・後円部南西側造り出しの全容解明と、東側における造り出しの有無
- ・前方部前面で確認されていた溝の追求と範囲確認
- ・主体部に関わる情報の収集



第3図 井ノ内車塚古墳調査区配置図 (1/500)

付表-2 井ノ内車塚古墳調査履歴一覧表

調査次数	調査年度	後 円 部			くびれ 部		前 方 部		
火 数	年度	頂	斜	裾	斜	裾	頂	斜	裾
		部	面	部	面	部	部	面	部
1	1967 S42				測量	調査			
2	1997 H9		測量調査						
3	1999 H11								
4	2011 H23								
5	2012 H24								
6	2013 H25								
7	2014 H26								
0	2015				測量	調査			
8	H27								



調査経過

今年度の調査では、9月3日から8日まで対象地全域における竹や樹木の伐採処分を実施した。その後、墳丘などの再測量作業(第4図)とトレンチ設定作業を9月10日に行い、10月5日から本格的な掘削作業に着手した。期間中は好天に恵まれ順調に調査作業が進行した。11月7日には、現地説明会を京都市芝古墳と同日に開催し、約240名の参加者を得ることができた(第5図)。また、現地説明会前後には諸先生方が来訪され、現地指導及び重要な教示を数多く頂いた。現地説明会後は、部分的な拡張作業や確認掘削作業を行い、記録作業がほぼ終了した11月16日から埋め戻しに着手した(第6図)。そして、器材撤去など全ての現地作業が終了したのは11月25日であった。

調査区の設定 (第3・7図、付表-2)

1トレンチ 第 3 次調査で検出されていた前方部前面を画する周溝を追求するため、前方部前面の東半に設定した。第 3 次調査南トレンチ・第 4 次調査 1 トレンチと重複しており、トレンチの規模は上場で東西約 9 m、南北約 4 m、面積 30.1 mを測る。なお、調査期間の終盤に、周溝の幅を確認するためトレンチの中央部を南へ拡張した。

2トレンチ 後円部の南東側において造り出しなど構築物の有無を確認するため、西側造り出 し南辺の対象位置に設定した。トレンチの規模は東西約2m、南北約4mで、4.7㎡を測る。

3トレンチ 主体部に関する情報を得るため、墳頂部から南東方向に延びる撹乱坑のほぼ中央に設定した。トレンチの規模は幅約1 m、北西から南東の長さ約10 mで、約6.4㎡を測る。

4トレンチ 3トレンチと同様に主体部に関連する情報を得るため、墳頂部の撹乱坑に設定した。第7次調査北トレンチと重複しており、トレンチの規模は東西約4m、南北約2mで、約4.6 ㎡を測る。

5トレンチ 西側造り出しの全容を解明するため、後円部西側から西側くびれ部にかけて、第6次調査2トレンチ・第7次調査中央トレンチと重複して設定した。トレンチの規模は東西約8 m、南北約12 mで、面積は約81.2㎡を測る。



第5図 現地説明会風景(南から)



第6図 5トレンチ 埋め戻し風景(北西から)



第7図 墳丘と調査区全体図 (1/200)

3 検出遺構

1トレンチ

前方部の墳丘斜面(第9図) 1トレンチの北辺では、表土、薮土の下で前方部前面の墳丘斜面を検出した。墳丘は後述する周溝によって周囲と画されるが、前方部前面は樹木の根株などによって乱されており、トレンチ中央部から東側がやや墳丘側へ湾曲していた。墳丘斜面の基部は黄褐色粘質土、茶黄色砂礫土の地山が削り出されており、その上に黒褐色の盛土が認められる。墳丘斜面はトレンチ西端で高さ 0.15 m程度を測るが、遺存状態は東側ほど悪く、第4次調査 1トレンチとの重複範囲では斜面がほぼ失われていた。墳丘盛土はトレンチの中央部分を中心に認められ、地山との境界は標高約 47.3 mを測る。また、前方部端部は標高 47.2 m前後を測る。

墳丘斜面の東側では地山面において不整形な土坑を確認した。土坑の埋土は墳丘盛土に似た黒 褐色粘質土であるが、遺物も出土しておらず古墳との関連は判然としない。

前方部南側の周溝(第8・9図) 前方部の前面を画する周溝は第3次調査南トレンチで確認されていたもので、本調査では重複部分を含め東西約7.5 mを確認した。また、周溝が前方部南東端まで掘削されておらず、その約3 m手前で途切れることも併せて確認している。第3次調査では周溝の上面幅が約1.7 mと報告されている。トレンチのほぼ中央部を拡張して溝幅の確認を試みたが、拡張部分では南肩が後世の地境溝によって失われていた。確認できた周溝の規模は、上面の幅2.4 m以上、底部の幅約2 m、深さ0.4 m前後を測る。周溝底の高さは、標高46.8 m前後で、第7次調査で検出した前方部西側の周溝底部高に比べ約0.3 m高い。周溝内には茶灰色系の埋土(第9図第12・13層)が堆積していたが、造り出し周辺のような複雑な堆積状況ではない。周溝からは整理箱にして2箱の埴輪片が出土しており、それらは底面からやや浮いた位置に比較的まとまっていた。また、周溝埋土の中位では長岡京期の遺物が数点出土している。

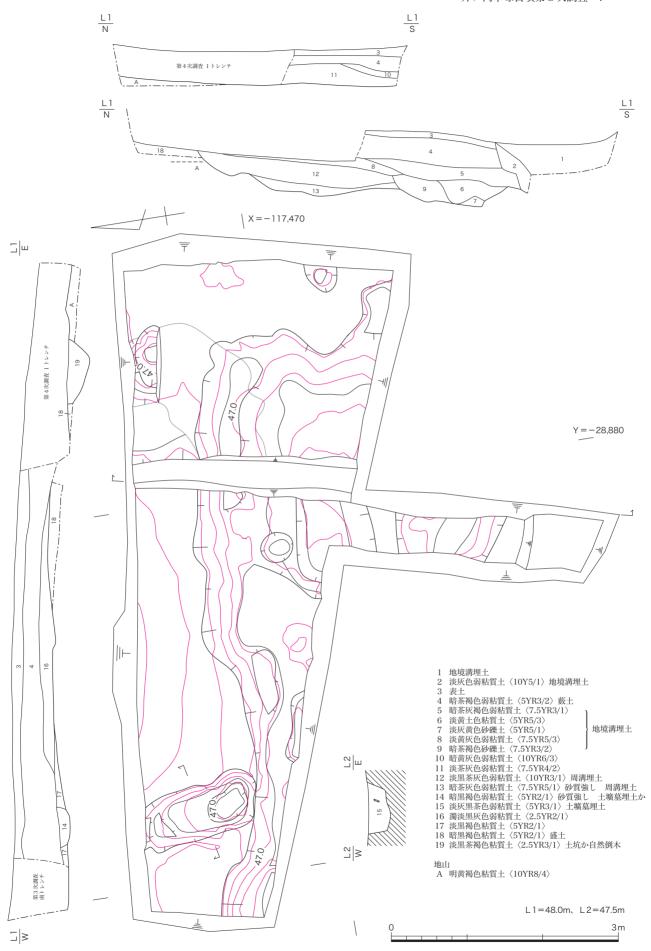


第8図 1トレンチ 前方部の周溝 (北西から)

その他の遺構

土壙墓(第9図) 1トレンチの西端、墳丘斜面で土壙墓1基を検出した。土壙墓と判断したのは埋土に鉄釘数点と刀子1点が含まれていたためであるが、棺身の痕跡は確認できなかった。土壙墓の主軸は墳丘主軸と異なりほぼ南北方向で、長軸1.6 m、幅0.7 m、深さ0.3 mを測る。土壙墓からは鉄製品の他、土師器・埴輪片が出土しており、土師器の特徴から長岡京期前後のものと考えられる。

地境溝(第9図) 周溝南肩と重複して黄灰色土・茶褐色土などを埋土(第5~9層)とする溝を検出した。現在の地境溝および擁壁があり全容を確認できないが、幅3m以上、深さ0.4 m以上を測る。埋土からは瓦器・埴輪片などが出土している。



第9図 1トレンチ 検出遺構図・土層図 (1/50)

2トレンチ

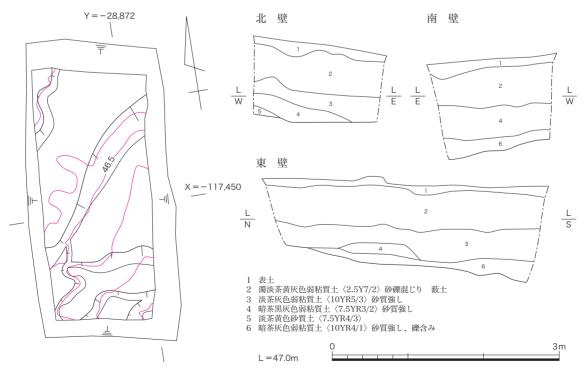
土層の堆積状況と出土遺物(第 10 図) 2トレンチでは、上から表土、薮土、茶灰~茶黄色 土の順に地山へ至る。茶灰~茶黄色土(第 3~5 層)は 0.4 m程度の厚さで堆積し、少量ながら 土師器・瓦器・埴輪片が含まれていた。また、墳丘盛土と考えられる黄褐色土や黒褐色土の混じ りが認められることから、この堆積層は後円部南東側の撹乱坑掘削によるものと考えられる。な お、地山の検出状況などから、後円部東側に造り出しなどの構築物は存在しないことが分かる。

墳丘外の平坦面と南東側への斜面(第 10 図) 2トレンチは推定される後円部裾の南東側にあたり、検出した地山面は墳丘外側の基盤となる地形と考えられる。基盤地形はトレンチの北西隅が最も高く、中央部へ向かって緩やかに傾斜する。高さは標高 46.6~ 46.8 mであり、第 4次調査 2 トレンチくびれ部付近における墳丘外の平坦地形とほぼ同じ値であった。南東側はトレンチ外へ続く斜面であり、トレンチ南東隅の最深部は標高約 46.2 mを測る。

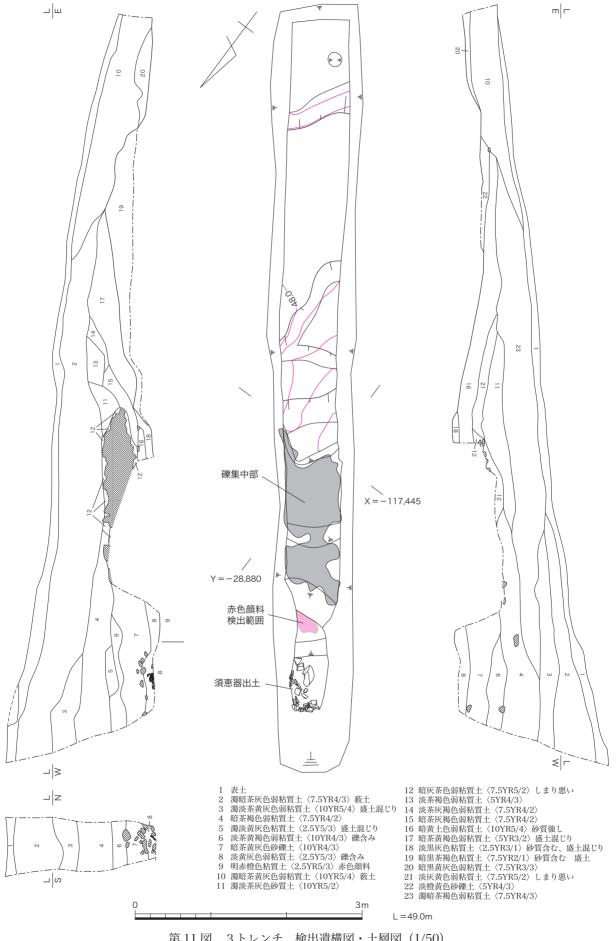
3トレンチ

土層の堆積状況と礫集中部(第 11 図) 3トレンチの北西部では表土、薮土を除去した段階で礫が集中する状況を確認した。礫は石組みなど意図的な配置が窺えず、また、礫間の灰茶色土も締まりの悪い土であることから、構造物ではなく投棄など二次的な移動によるものと考えられる。井ノ内車塚古墳では過去にこのような礫の集中が確認されていない。礫は人頭大に近く、一般的な石室壁体や裏込石として相応しいものではないが、検出位置や深さなど横穴式石室との関連が非常に注目される。このため、調査では礫の除去を土層観察で必要となる範囲に止めた。

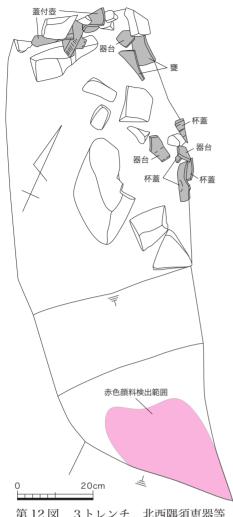
礫集中部を含む堆積層(第 $4 \sim 7 \cdot 11 \sim 18 \cdot 21$ 層)は厚さ $0.2 \sim 1$ mで、北西側を中心に認められる。礫集中部より南東側では堆積層の下で墳丘盛土と考えられる黒茶褐色土(第 19 層)



第10図 2トレンチ 検出遺構図・土層図 (1/50)



第11図 3トレンチ 検出遺構図・土層図 (1/50)



第 12 図 3 トレンチ 北西隅須恵器等 出土状況実測図 (1/10)

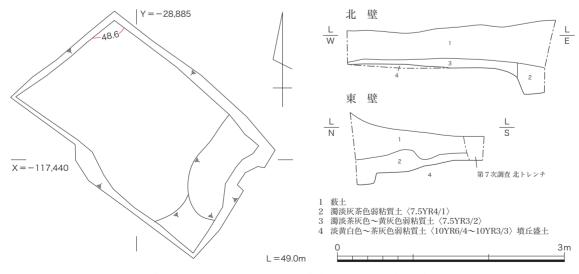
を、後円部中心に近い北西側では須恵器を含む黄灰色 土 (第8層) と赤色顔料 (第9層) を確認している。

須恵器と赤色顔料(第11・12 図) 3トレンチ北西隅では、第8層から須恵器片が比較的まとまった状態で出土した。杯蓋2個体以上・蓋付壺1個体・器台1個体以上・甕1個体があり、杯蓋は陶邑窯 TK10型式の特徴を備えている。須恵器が出土した高さは47.7 m前後で、現地下約1.9 mにあたる。また、厚さ約0.15 mの第8層を部分的に除去した範囲で赤色顔料と考えられる土を確認した。須恵器、赤色顔料は横穴式石室の葬送儀礼に伴う可能性を強く示唆している。このため調査では須恵器の取り上げに留め、第8層、赤色顔料とも検出状況のまま埋め戻しを行った。

4トレンチ(第13図)

4トレンチでは、表土、濁茶灰色土の下で、黄白色ないし茶灰色粘質土 (第4層)の墳丘盛土を確認した。トレンチ南東部では、第7次調査北トレンチから続く撹乱坑を検出している。この撹乱坑は前述した3トレンチの撹乱坑と一連のものと考えられ、撹乱坑が推定される後円部の中心付近から掘削されたことを想定させる。墳丘盛土とした面は標高約48.6 mであり、3

トレンチにおける須恵器等の出土高に比べて約 0.9 m高い位置であった。墳丘盛土とした土については、石室の有無と密接に関連するため、今後の調査結果を待って再検討を行う必要がある。なお、4トレンチでは表土、撹乱坑埋土から少量の埴輪片が出土している。



第 13 図 4 トレンチ 検出遺構図・土層図 (1/50)

5トレンチ

土層の堆積状況(第14図) 後円部西側、造り出し北辺の土層堆積状況は、第7次調査中央 トレンチで得られた知見とほぼ共通するものであった。以下、堆積の状況をより上位のまとまり である I 層から述べるが、文中の()内にはまとまりに含まれる個別の土層番号を示した。

表土の下にはI層とした墳丘盛土が混じる濁った土がある(第3~9層)。この層は薮の開墾 など墳丘西側の削平に伴うものであり、僅かではあるが近世陶磁器片を含んでいた。

II 層は灰色土を主体とする弱粘質土と砂礫土 (第 12・13 層) で、II 層上層 (第 12 層) を完 全に除去した段階で造り出し上部の輪郭が姿を現す。

Ⅲ層は混じりの少ない茶灰色ないし黄灰色粘質土(第 14~ 16 層)で、ほとんど遺物が含ま れていなかった。他の堆積層と異なる状況であるため、周溝の窪みを埋めるために他所からもた らされたものとも考えられる。

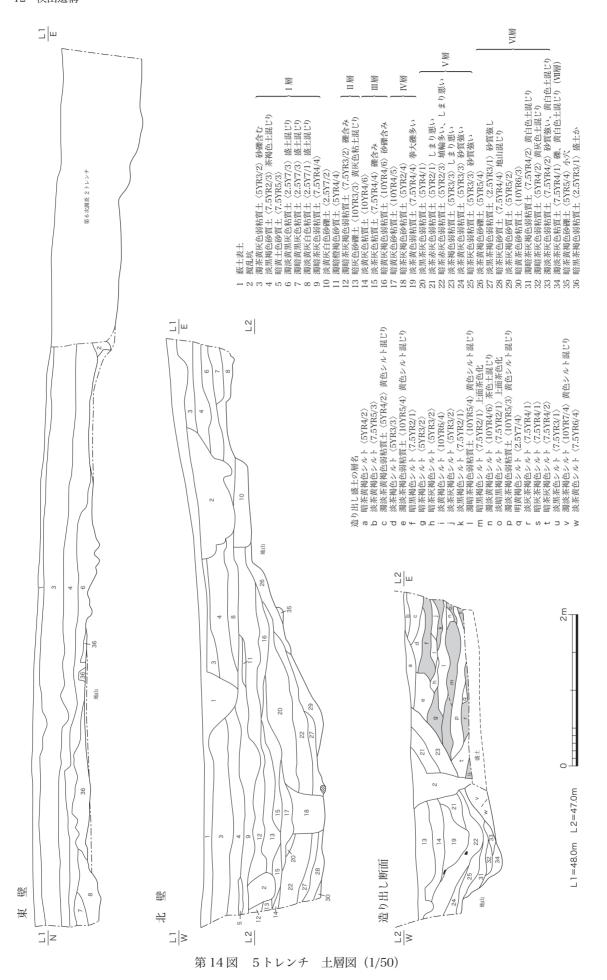
IV層は比較的明るい茶黄色土(第17~19層)を主体とする。第7次調査の造り出し西側で はその範囲が溝状を呈しており、本調査でも溝状の範囲がさらに南北へ続くことを確認している。 これまでIV層は周溝の窪みに堆積したものと評価していたが、北壁土層観察やより下層の遺物出 土状況から、造り出し下半が埋没した段階で掘削された溝とも考えられる。IV層には埴輪片とと もに、少量ながら平安時代~中世の土師器、須恵器、瓦器片が含まれていた。

V層は赤みの強い茶灰色弱粘質土(第20~25層)で、最大0.5 mの厚さまで堆積していた。 造り出し西側では埴輪片が多く含まれていたが、造り出しの北側においても下層(第 20 層下半、 第22層)から大量に出土している。V層の堆積によって造り出しはほぼ埋没しており、後円部 を含む裾部の外観が大きく改変されたものと考えられる。

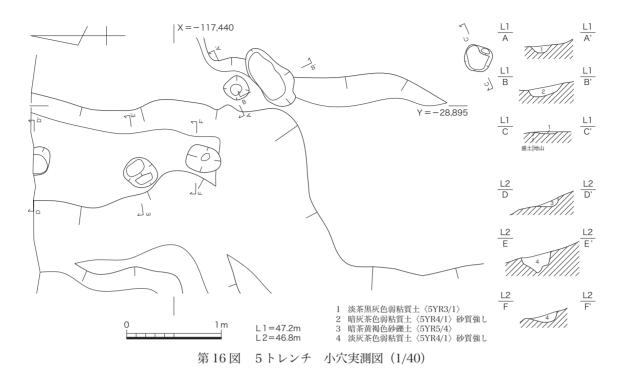
VI層は暗い茶灰~茶褐色を呈しており、地山の砂礫や造り出し盛土の粘土が混じる堆積層であ る (第26~33層)。特に、造り出し由来の粘土は葺石を施さない墳丘の崩落過程を示すもので あるが、埴輪片以外の遺物がほとんど含まれていなかったため、VI層がどの程度の期間を経て堆 積したのかは判然としない。

最下層のVII層(第 34 層)は茶灰色系の粘質土を主体とするが、その性質からは周溝内の恒常 的な滞水は認められない。この層は造り出し西側の溝状を呈する窪みに堆積しており、後円部西 側にあたるトレンチ北壁では認められなかった。また、その堆積状況からは、この層が主に周溝 西側の急峻な地山斜面からもたらされたことが分かる。

後円部の西側斜面(第7・15・16 図) 検出した後円部西側斜面はすべて地山を削り出して 形成されている。後円部西側の裾部は標高 46.1 mを測り、第7次調査北トレンチの推定裾部高 より 0.7 m低い位置にあるが、この高低差は古墳西側の周溝が造り出し周辺を中心に深く掘削さ れたため生じたものと考えられる。裾部から 0.5 mの高さまでが傾斜角度約 25° の斜面で、その 上には造り出しの北側接続部分で収束する幅 0.5 ~ 1.8 mの不明瞭な平坦面が認められる。この 平坦面上では地山から掘削された小穴3基が検出された。いずれも長軸 0.3 m前後の不整円形で あり、深さは $0.1 \sim 0.25 \text{ m}$ を測る。小穴は古墳との関連が非常に注目されるが、埋土には遺物



第15 図 第6次調査2トレンチ・第7次調査中央トレンチ・本調査5トレンチ検出遺構図(1/50)



が全く含まれておらず、柱痕跡も検出されていない。また、小穴の間隔も不均一であったため、 埴輪や木製樹物の据え付け坑と判断できなかった。

後円部西側は、前述した平坦面から高さ 0.3 mで約 35°の斜面を経て、造り出し上面と同じ高 さとなる。この部分には造り出し接続部から続く幅1m前後の平坦面が認められる。この平坦面 においても地山から掘削された小穴が3基検出された。南と北の形態は下段の小穴に近いが、他 1 基は長軸 0.6 mの長楕円形であり、埋土も締まりの悪い弱粘質土であった。この平坦面の東側 には 0.15 m前後の段差があり、 墳丘側では地山まで達する撹乱坑が数カ所認められる。

後円部の盛土(第7・14・15 図) 後円部の基部は地山を削り出して形成されているが、ト レンチ東壁では部分的に墳丘盛土と考えられる黒茶褐色弱粘質土(第14図第36層)を確認した。 第 36 層を墳丘盛土とした場合、地山との境界は標高 47.5 m前後であり、第 7次調査北トレン チの後円部北西斜面における地山標高(47.3 m)、第3次調査北トレンチの後円部北斜面(47.5 m)、第5次調査1トレンチの後円部北東斜面(47.3 m)に近い値であることが分かる。

前方部の地山標高は、前方部前面の第3次調査南トレンチ、第4次調査1トレンチ、本調査 1トレンチが後円部に近い標高 47.3 mであるのに対し、くびれ部付近の第 5 次調査 2 トレンチ (46.9 m)、第6次調査2トレンチ(46.8 m)、前方部東側の第7次調査南トレンチ(46.6 m) では 0.5 m程度低い値が得られている。井ノ内車塚古墳の基盤である地山のあり方については、 周辺地形を含めた検討が必要だろう。

造り出し(第15図) 井ノ内車塚古墳の造り出しは、後円部南西側から西くびれ部の間に接 続しており、本調査では造り出し北辺の状況を明らかにできた。造り出しの規模は、上面の南北 幅が約5mと推定され、南西側への突出が2.5mを測る。また、造り出しの裾部における規模は、 南北の幅 8.3 m、南西側への突出が 4.5 mを測る。西側の周溝底から検出した造り出し上面まで

の高さは 1.2 mであった。なお、造り出し上面では原位置を留める埴輪や埴輪据え付け坑が検出されておらず、また、造り出し周辺から大量の埴輪片が出土していることから、古墳築造当時の造り出し上面は失われているものと考える。

造り出しの盛土(第 14・15 図) 造り出しはすべて盛土によって構築されており、第 15 図には盛土の平面的な範囲を示した。盛土には地山由来の黄色土を主体とする層、黒褐色の層などがあり、これらが交互に積み重ねられていた。また、造り出し下半部では、前面を土手状に厚く施した後、その内側を充填する状況が認められた。さらに、造り出し上面では、盛土充填時の単位と考えられる長軸 0.5 m前後の楕円形ブロックを確認している。

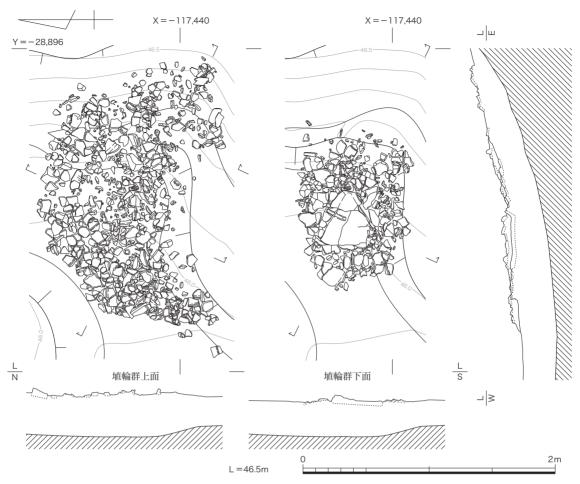
造り出し接続部と平坦面(第7・15 図) 後円部と造り出しの接続部は、地山と盛土の境界線として確認でき、後円部と同様な円弧を描く。前述したように接続部の検出面は後円部で確認された平坦面と同じ高さで、あたかも2段築成の墳丘平坦面に造り出しが接続するように見える。しかし、平坦面から墳丘斜面への立ち上がりにあたる低い斜面は、後世の削平によって生じたものであり、造り出しおよび平坦面の上面と同様に古墳築造時の姿を留めるものではない。

これまで井ノ内車塚古墳では外表施設として段築が確認されていない。しかし、これは墳丘斜面に葺石が施されておらず、さらに根株などで乱されていること、埴輪列や埴輪据え付け坑など平坦面の存在を示す成果が得られていないためでもある。

井ノ内車塚古墳では埴輪片が造り出し周辺から大量に出土する。しかし、造り出し以外の範囲、例えば前方部東側の第5次調査2トレンチでは墳丘外の平坦地形上で多くの埴輪片が、また、後円部北西側や前方部西側、そして前方部前面でも一定量が出土している。一方、調査において検出された墳丘等高線からは、後円部造り出し周辺の平坦面以外に後円部北西側と南東側の標高47.5 m付近で斜面が緩やかになる範囲が認められる。また、前方部東側および西側の標高47.5~47.7 mでは、前方部の開きに沿う平坦面を読み取ることができる。こうした平坦面は後世の削平によるものであるが、古墳築造当時の墳丘平坦面の位置に影響を受け、削平や竹薮の開墾が行われた可能性も考慮する必要がある。

造り出し周辺の地山(第7・15 図) 後円部南西側に接続する造り出しは、その前面が底部幅約1 mの周溝によって外部から切り離されていた。第7次調査中央トレンチではトレンチ南西部を拡張し、古墳周溝より西側の地山面を明らかにしている。西側の地山面は標高約46.8 mで確認されており、造り出し周辺では深さ約1 m以上の掘削が行われたことが分かる。

造り出し西辺の周溝は凹字形に窪んでおり、その底部は標高 45.7~46.0 mを測る。これに対し、造り出し周辺以外の墳丘裾部高は標高 46.5~47.4 m(主軸上の後円部端約 47.4 m、後円部北東側約 46.9 m、東側くびれ部 46.5 m前後、前方部南東隅 47 m前後、主軸上の前方部端約 47.2 m)と 0.8 m以上高い位置にある。第 6 次調査 2 トレンチでは造り出し南西隅から前方部に向かって周溝底が緩やかに立ち上がる状況が明らかにされており、造り出し周辺の地山がより深く掘削されたために高低差が生じたものと推測できる。このような造作は、造り出しの高さを強調するとともに、古墳築造に際する省力化を図るために行われたと考えられる。



第17図 5トレンチ 造り出し北辺埴輪出土状況実測図 (1/30)

造り出し周辺の埴輪出土状況(第14・17図) 造り出し周辺の周溝内からは大量の埴輪片が 出土しているが、本調査の出土遺物は本格的な洗浄作業に着手していないため詳細を明らかにで きない。埴輪を中心とした遺物の出土量を概算で示せば、造り出し南辺の第6次調査2トレンチ で整理箱にして約20箱、西辺の第7次調査中央トレンチが16箱、北辺にあたる本調査5トレ ンチでは21箱で、造り出し周辺の周溝からはこれまでに計60箱近い遺物が出土している。出 土遺物の大部分は普通円筒埴輪であり、須恵質の硬質な焼き上がりのものが目立つ。形象埴輪は 橙色を呈する軟質のものが多い。形象埴輪の器種には家、蓋、巫女、馬、犬、石見型などが確認 されており、造り出し上に多彩な埴輪群が配されていたことが分かる。

造り出し北辺では、後円部西側と造り出し北辺に挟まれた谷状部で埴輪片が集中する状況を確 認した。埴輪はV層(第 14 図第 20・22 層)の下半に多く含まれる。特に大きな破片として家 形埴輪の寄せ棟部片があり、堅魚木も数点確認している。家形埴輪片は棟の一辺がほぼ水平状態 で出土しており、内面の接続突起から母屋の位置が窺える。また、第17図には図化していないが、 この範囲からは鶏形埴輪の雄・雌頭部片が1点づつ出土している。埴輪密集範囲に含まれる破片 は大半が 10cm までであり、造り出しにおける埴輪祭祀の後に破壊され、周溝へ投棄されたも のとも考えられる。なお、第7次調査と同様に1m方眼の区画を設定し遺物の取り上げを行って おり、今後の整理作業で埴輪の面的な過多、形象埴輪の分布などを検討する予定である。

4 まとめ

井ノ内車塚古墳はこれまでの調査で、墳形や規模、盛土の状況、そして、多彩な形象埴輪を持つことが明らかとなっている。本調査では、以下のような成果を新たに収めることができた。

- ① 第3次調査で検出された溝が前方部前面を画することを再確認した。
- ② 後円部南東側には造り出しなどの施設が存在しないことを明らかにした。
- ③ 後円部南東側撹乱坑内で横穴式石室の存在を示唆する須恵器、赤色顔料などを確認し、初めて主体部に関する情報を得ることができた。
- ④ 後円部西側斜面の状況と、南西側に接続する造り出しの全容を明らかにした。
- ⑤ 新たに大量の埴輪資料が得られ、形象埴輪では鶏形埴輪の存在を初めて確認した。

特に、横穴式石室の確認に迫る資料が得られたことは、本調査で最も重要な成果といえる。横 穴式石室の存在を確認しその内容を解明することは、乙訓古墳群における井ノ内車塚古墳の位置 付けだけでなく、他地域との比較によって、乙訓古墳群や古墳時代後期の乙訓地域を評価するた め欠くことのできない非常に重要な事項である。今後、詳細な調査の実施が待たれる。

- 注1) 清家 章「井ノ内車塚古墳第3次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年
 - 2) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第4次調査概要」『長岡京市報告書』第61冊 2012年
 - 3) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第5次調査概要」『長岡京市報告書』第64冊 2013年
 - 4) 山本輝雄「井ノ内車塚古墳第6次調査概要」『長岡京市報告書』第66冊 2014年
 - 5) 中島皆夫「井ノ内車塚古墳第7次調査概要」『長岡京市報告書』第68冊 2015年

付表-3 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ					
書 名	長岡京市文化財調査報告書					
副書名						
シリーズ名 長岡京市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 69 冊					
編著者名	中島皆夫					
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター					
所 在 地	〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1					

所収遺跡名	所 在 地	市町村	- ド 遺跡番号	北糸	牟	東	経	調査期間	調査面積	調査原因
いのうちくるまづかこふん 井ノ内車塚古墳		26209	2	34°56′2	2"	125°/	41′01″	20150820	148m²	範囲確認
長岡京跡	井ノ内向井芝4	20209	107	34 30 20)	133 -	±1 U1	20151125	140111	調査

遺	跡 名	種	別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	'内車塚古墳	古	墳	古墳時代		埴輪(普通円筒埴輪・朝 顔形埴輪・形象埴輪)、 土師器、須恵器、瓦器、 陶磁器	次調査。後円部南西
	長岡京跡 京第 1119 次)	都	城	平安時代			穴式石室を示唆する 須恵器などを確認。

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

図 版



調査地全景(北西から)



(1) 1トレンチ 全景 (南東から)



(2) 1トレンチ 全景(西から)

井ノ内車塚古墳第8次(長岡京跡右京第1119次)調査



(1) 1トレンチ 前方部周溝の遺物出土状況 (東から)



(2) 1トレンチ 周溝の堆積状況 (南西から) (3) 1トレンチ 土壙墓 (南から)





(1) 2トレンチ 全景 (南東から)

(2) 2トレンチ 全景(北から)



(3) 3トレンチ 全景 (南東から)

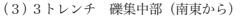
井ノ内車塚古墳第8次(長岡京跡右京第1119次)調査





須恵器出土状況(南東から) (2)3トレンチ 赤色顔料出土状況(北西から)







(4) 4トレンチ 全景 (南西から)

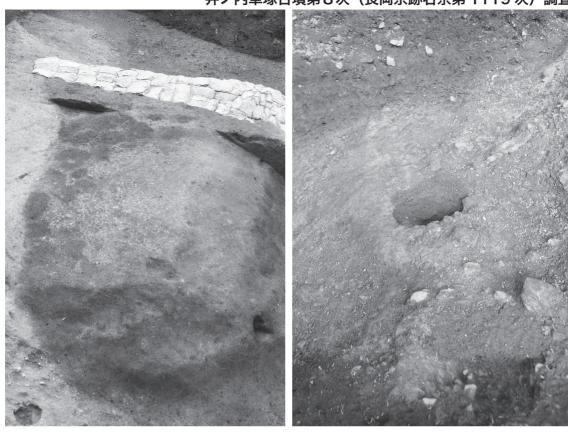


(1) 5トレンチ 全景 (南西から)



(2) 5トレンチ 全景 (東から)

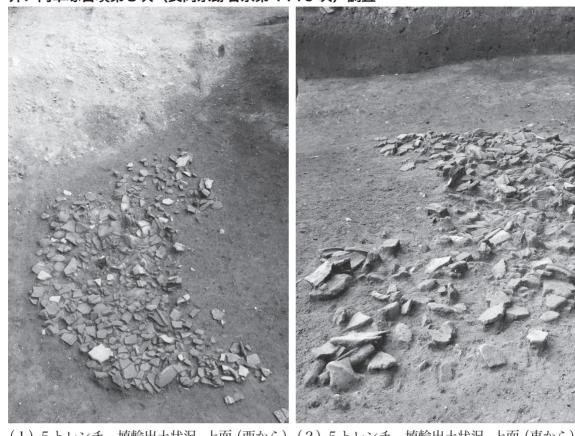
井ノ内車塚古墳第8次(長岡京跡右京第1119次)調査



(1) 5トレンチ 造り出し上面の状況(北西から)(2) 5トレンチ 造り出し北側の小穴(南から)



(3) 5トレンチ 造り出しと北壁の土層堆積状況(南から)



(1) 5トレンチ 埴輪出土状況-上面(西から)(2) 5トレンチ 埴輪出土状況-上面(東から)



(3) 5トレンチ 埴輪出土状況-下面(西から)(4) 5トレンチ 埴輪出土状況-下面(北東から)

長岡京市文化財調査報告書第 69 冊

平成 28 (2016) 年 2 月 22 日 発行

編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617 – 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電話 075 - 955 - 3622 FAX 075 - 951 - 0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒 617 - 0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 - 1

電話 075-951-2121 (代)

印 刷 山代印刷株式会社

〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内町通小川西入 宝鏡院東町 588 番地

電話 075 - 441 - 8177 FAX 075 - 441 - 8179